

「サバティカル」

主任司祭 晴佐久 昌英

「サバティカル」とは一般に「研修休暇」などと訳されたりもするが、語源はヘブライ語のサバト、すなわち「安息日」であり、単なる「研修」や「休暇」とは本質的に意味が違う。

安息日はあくまでも「主の日」であり、神の安息の日である。それは、神がその創造のわざを完成させて充足なさせた、神ご自身の喜びの日であり、被造物がその喜びに与る日なのである。決して、労働の効果をあげるためとか、勉強の効率をよくするためというような、人間の都合で休む日ではない。

「安息日を聖とせよ」という旧約の掟は、人間のわざを離れて神の領域に入れという、神ご自身からの招きである。その神の創造のわざはイエス・キリストにおいてこそ完成したのだから、キリストこそが神の領域であり、聖別された真のサバトである。人は、神に招かれて洗礼を受け、ミサに与り、サバトに入る。それは天における永遠のサバトの始まりでもある。

司祭生活も二十年を過ぎ、教区の内規を参考に、半年のサバティカルを取ることにした。成り行きでパリで暮らすことにしたが、どこでもよかった。「休暇」がほしかったわけではない。今の自分を離れて、サバトに入りたかった。

よく「ゆっくり休んで来てください」と言われるが、言うほど疲れてもいない。普通、疲れている人は温泉に行くのであって、豪雨と突風の無人島キャンプに出かけたりはしないものである。中には「いいご身分ですね」などという人もいるが、パリでも入門講座と復活祭の洗礼式をする予定であり、そもそも本拠地を半年離れるというのは、中々大変な事でもある。その間の依頼を全て断ったり、留守中のことでみんなに迷惑をかけたりする心理的負担もある。

それでも、サバト。たぶん、ぼくの中の人間のわざが大きくなりすぎているので、神が招いてくださったのだと思う。何でも上手にこなしているつもりの中の人間の領域から、神が働かなければ何ひとつうまくいかない、神の領域へ。

その意味で言うならば、確かに疲れていたのかもしれない。人間の評価に振り回される自分、人間の努力を重ねている自分に。